大分県現代俳句協会句会報　第16号

【令和3年　自薦作品結果号】

令和3年12月30日発行

令和三年自薦作品結果発表（選句＆選評）

19点　永遠に泣かぬ子となり初秋祭　河野　輝暉

17点　身のどこか枯れてゆくおと続きおり　谷川　彰啓

15点　現世の闇の深さを赤とんぼ　足立　町子

14点　いっぽんの海になるまで刃物とぐ　河野　泉

14点　八月の焦土へ続く縄電車　足立　攝

14点　にんげんの終（つい）の姿か日向ぼこ　谷川　彰啓

《12点句》

素直なるものから揺れて秋の風　梶原　千代
木枯しのかるさや母の車椅子　河野　泉
鬼灯の中の昭和が燃えている　足立　攝
真夏日の死ぬまで戦死の兄を詠む　有村　王志
言い訳をしない金魚と目を合わす　上田たかし

《11点句》

喪疲れやのたりのたりと春の海　河野　輝暉

《10点句》

加速する荒廃農地捨案山子　田代　直之
夜に鳴く都会の蝉よ父の死よ　足立　攝
アフガンの涙を乗せて鶴来たる　幸谷　恵子
藁塚のひかりほどけて火の匂い　足立　町子

《9点句》

晩秋のひかりの中に夫の鍬　飯田　幸子
赤い糸辿れば天の川に逢う　田口　辰郎
風鈴に母の小言を少し足す　児玉　利子

《8点句》

長月のマスクの下に貌がない　足立　攝
空蝉がこの世にしがみついている　神　慶子
風鈴や体内時計の違ふ母　松廣　李子
十五夜を残し早寝のしまい風呂　時松由美子

《7点句》

夕月夜しばらくきしむ夫の椅子　梶原　千代
たまに空みたくて蟻の木に登る　福田　英子
秘めごとは蛍袋に入れたまま　宮川三保子
初夏へ子の名は夏樹納骨す　河野　輝暉
マスクして昭和の耳で聞くラジオ　谷川　彰啓
十年の除染土月光刺さったまま　有村　王志
夏座布団語りつくせぬ兄の居る　有村　王志
あじさいや朝の手紙にすこしうそ　伊藤　利惠
地下鉄を出て風鈴の古本屋　上田たかし
焼きなすのところどころにある本音　本田　圭子

《6点句》

一つずつ昭和が消えて秋時雨　早澤まり子
吹く風に向き合うのれんななかまど　甲斐加代子
コロナ禍の大地の春へ鍬を打つ　谷川　彰啓
新聞をぱさりと閉じて終戦日　足立　鶴男
汚染なき空より流れ星が来る　田口　辰郎
飲みこんだはずが飛び出るほうせんか　赤峰佐代子
打ち水で客をもてなす下駄の街　東香　代子
濁り酒二口目から女です　鎌倉真由美
一瞬に人皆生きて曼珠沙華　灘波　瑞枝
核心に触れ得ず西瓜食べ終わる　吉田　素子
百六歳母に施設の夏祭り　安森　範明

《5点句》

菩提寺はいま木犀の檻の中　飯田　幸子
枝豆や男の愚痴のたわいなし　福田　英子
生きている死に顔拝む春灯　河野　輝暉
吾亦紅触れて新妻こぼれけり　菅　攝子
睡蓮や久女の憂鬱などうふふ　松廣　李子
予約したように群れ来る盆とんぼ　鎌倉真由美

《4点句》

鷺草の明日翔つ闇の息づかひ　梶原　千代
断捨離に子らの思い出鳳仙花　原田　勝子
忍び寄る気候変動穴惑い　田代　直之
秋深し川は昔のまま流れ　坂本　一光
衣被昭和うすれる塩加減　甲斐加代子
筍や大地のこだま堀り当てる　菅　登貴子
この西瓜あげてさげれば僕のもの　佐藤　珠幸
マスクして無声映画の街をゆく　御手洗豊海
出来ぬこと日毎に増えて秋が逝く　倉迫　順子
世を捨てて秋蝶肩の力抜く　平田千代子
引き算の答となりし烏瓜　岸本千鶴子
田の畦に亡き父燃えて曼珠沙華　灘波　瑞枝
故里は未完のままに虫すだく　下司　正昭
あの夏を僕らは決して忘れない　下司　正昭
赤とんぼまだ初恋がぶらさがる　上田たかし
昭和史の暗部は無言曼珠沙華　上田たかし
にんげんに右脳がありて春隣　本田　圭子
人住まぬ庭に律儀な金木犀　時松由美子
新姓になりし孫娘（むすめ）の年賀状　井元　扇岳

《3点句》

密葬やトンボ静かに羽ひらく　河野　泉
裸木を横目にポーズ百の歳　嶋末　洋子
振り向けば生きた色かも椿の実　甲斐加代子

令和三年自薦作品集（点盛）

1 ⑫素直なるものから揺れて秋の風　梶原　千代
2 ①告別へ矢印の指す露の径　梶原　千代
3 ④鷺草の明日翔つ闇の息づかひ　梶原　千代
4 ⑦夕月夜しばらくきしむ夫の椅子　梶原　千代
5 ⑭いっぽんの海になるまで刃物とぐ　河野　泉
6 ③密葬やトンボ静かに羽ひらく　河野　泉
7 ⑫木枯しのかるさや母の車椅子　河野　泉
8 山そばの蕎麦刈る地下足袋沖に干す　河野　泉

かきつばた女盛りを過ぎてなお　神　慶子
素面ではつまらなそうに昼の月　神　慶子
食べて寝てもう一度醒め栗ごはん　佐藤　珠幸
冬蝶のほろりと風になりにけり　菅　攝子
柚子空や嫁に来し日の襟明かり　菅　攝子
ワイシャツを脱いで故山の貌でいる　有村　王志
指先に君を残して秋に入る　陣野千恵子
素になれる君との時間酔芙蓉　陣野千恵子
丑三つの金魚綺麗になるばかり　陣野千恵子
燃え上がる恋にもちゃんと水を打つ　陣野千恵子
敦盛の音色伝えて菊人形　谷本　親史
これからは余生と決めて冬銀河　御手洗豊海
人面をいくつ探して柿落葉　東　香代子
タリバンと取引しない曼珠沙華　稲田久美子
素人が頭叩いて買う西瓜　佐藤　哲夫
とんぼうと妻が見送る始発駅　佐藤　哲夫
花種を蒔きて帰らぬ人を待つ　西峯　峰子
菊根分吾子には吾子の暮らしあり　西峯　峰子
結局はいつもの話しゃぼん玉　本田　圭子
唇に秋のこの唄連れてくる　林　香澄
地のほむら胸の焔に水を打つ　吉田　素子
たっぷりと水供えけり敗戦日　吉田　素子
香水が遠いあの日を連れてくる　小野みち子
放課後のふっと無口になる糸瓜　足立　町子

9 ①早起は三文得と梅漬ける　嶋末　洋子
10 桜の実散って新芽の道とする　嶋末　洋子
11 雨上がり次は雨乞四季麗ら　嶋末　洋子
12 ③裸木を横目にポーズ百の歳　嶋末　洋子
13 ①待ちに待つ石榴割れる日昨日今日　原田　勝子
14 ④断捨離に子らの思い出鳳仙花　原田　勝子
15 ①肩寄せてなんじゃもんじゃと松尾句碑　原田　勝子
16 ①おちょぼ口吸いつく今朝の無花果かな　原田　勝子
17 ⑥一つずつ昭和が消えて秋時雨　早澤まり子
18 道端の露ひとつぶや手の平に　早澤まり子
19 盆の風久しく寺の門くぐり　早澤まり子
20 ①老いの肩つと影落とす黒揚羽　早澤まり子
21 ⑩加速する荒廃農地捨案山子　田代　直之
22 ①成長は変化の証し衣被　田代　直之
23 ④忍び寄る気候変動穴惑い　田代　直之
24 ①同色に合わすぐい呑み菊膾　田代　直之
25 ①斑猫が飛んで分水嶺の黙　坂本　一光
26 斑猫と分水嶺へ急ぐ道　坂本　一光
27 ④秋深し川は昔のまま流れ　坂本　一光
28 ②秋深し十七音にあるドラマ　坂本　一光
29 ⑭八月の焦土へ続く縄電車　足立　攝
30 ⑩夜に鳴く都会の蝉よ父の死よ　足立　攝
31 ⑧長月のマスクの下に貌がない　足立　攝
32 ⑫鬼灯の中の昭和が燃えている　足立　攝
33 ⑥吹く風に向き合うのれんななかまど　甲斐加代子
34 ④衣被昭和うすれる塩加減　甲斐加代子
35 ③振り向けば生きた色かも椿の実　甲斐加代子
36 地球上一と呑み照らす今日の月　甲斐加代子
37 ②草の露現し世映ししずもれし　菅　勲
38 ①花蕎麦や心の闇を照らしけり　菅　勲
39 ②すすき野や阿蘇の五岳を揺らしけり　菅　勲
40 ②曼珠沙華地球の鼓動聞かせけり　菅　勲
41 ③かきつばた女盛りを過ぎてなお　神　慶子
42 ⑧空蝉がこの世にしがみついている　神　慶子
43 ②無口なる二人に秋雨降りやまず　神　慶子
44 ③素面ではつまらなそうに昼の月　神　慶子
45 ①紫陽花の黙の深さに頷きぬ　飯田　幸子
46 故郷の初秋の風に身をまかす　飯田　幸子
47 ⑤菩提寺はいま木犀の檻の中　飯田　幸子
48 ⑨晩秋のひかりの中に夫の鍬　飯田　幸子
49 母の字の子等には優し合歓の花　甲斐千恵子
50 西瓜もみ午後総会へ持ち込みぬ　甲斐千恵子
51 ②花筒の梅の芽吹きや母父の墓　甲斐千恵子
52 ①押し入れに眠るレコード土用干し　甲斐千恵子
53 窓の外座って見るよ秋の月　小川　良子
54 松木川流れる先の芒原　小川　良子
55 ②急行の停まらぬ駅や女郎花　小川　良子
56 葛の花こぼれて庭にとどまれり　小川　良子
57 ②刈られても刈られてもなお曼珠沙華　永松左世美
58 三差路の土手にこすもす黄信号　永松左世美
59 竹藪に秋風の道我の道　永松左世美
60 こおろぎの三段とびを追いかけて　永松左世美
61 ①大きな夏なにかが起こる穴まどい　あべまさる
62 雨降れば笛の音に似て蚯蚓鳴く　あべまさる
63 ①秋めくと日常の事ばかり夢　あべまさる
64 ①昭和っ子昔も今も星まつり　あべまさる
65 ⑦たまに空みたくて蟻の木に登る　福田　英子
66 ②向日葵も少女も只今反抗期　福田　英子
67 ⑤枝豆や男の愚痴のたわいなし　福田　英子
68 ②飛ぶまでの蜻蛉の影を見てをりぬ　福田　英子
69 ②向日葵の光の中を車椅子　宮川三保子
70 ①白粉花ゆっくり渡る夫婦杖　宮川三保子
71 ⑦秘めごとは蛍袋に入れたまま　宮川三保子
72 ②地の涯に農を継ぎたる赤まんま　宮川三保子
73 ⑲永遠に泣かぬ子となり初秋祭　河野　輝暉
74 ⑦初夏へ子の名は夏樹納骨す　河野　輝暉
75 ⑤生きている死に顔拝む春灯　河野　輝暉
76 ⑪喪疲れやのたりのたりと春の海　河野　輝暉
77 ②秋深く手術夜の亡夫会いに来た　大神　愛子
78 ①意地を張る老母のたわごと聞かぬ子等　大神　愛子
79 彼岸花一本手折りし花瓶挿す　大神　愛子
80 盆も過ぎ気が抜けたりて一人寝の夜　大神　愛子
81 ⑭にんげんの終(つい)の姿か日向ぼこ　谷川　彰啓
82 ⑦マスクして昭和の耳で聞くラジオ　谷川　彰啓
83 ⑰身のどこか枯れてゆくおと続きおり　谷川　彰啓
84 ⑥コロナ禍の大地の春へ鍬を打つ　谷川　彰啓
85 ①戦闘機にコロナを乗せて五色の輪　足立　鶴男
86 ①コロナ禍や命と競う夏五輪　足立　鶴男
87 ⑥新聞をぱさりと閉じて終戦日　足立　鶴男
88 ①痛み持つ人に寄り添う愛の羽根　足立　鶴男
89 祖父の瞳の懐かし春の甲子園　菅　登貴子
90 ④筍や大地のこだま堀り当てる　菅　登貴子
91 ②銀座への思い出募るソーダ水　菅　登貴子
92 ②梅雨晴れ間美容師の手の美しき　菅　登貴子
93 ③食べて寝てもう一度醒め栗ごはん　佐藤　珠幸
94 ②少年のとんぼが夜を連れてくる　佐藤　珠幸
95 ④この西瓜あげてさげれば僕のもの　佐藤　珠幸
96 ②コロナ禍の嘘が溶けこむ金魚鉢　佐藤　珠幸
97 ①海へ向く乙女心や萩白し　菅　攝子
98 ⑤吾亦紅触れて新妻こぼれけり　菅　攝子
99 ③冬蝶のほろりと風になりにけり　菅　攝子
100 ③柚子空や嫁に来し日の襟明かり　菅　攝子
101 ⑥汚染なき空より流れ星が来る　田口　辰郎
102 ②宛先の決まらぬままで秋に入る　田口　辰郎
103 ②枯れ切れぬ乳房夜風にゆれやまぬ　田口　辰郎
104 ⑨赤い糸辿れば天の川に逢う　田口　辰郎

105 ⑫真夏日の死ぬまで戦死の兄を詠む　有村　王志
106 ⑦十年の除染十月光刺さったまま　有村　王志
107 ③ワイシャツを脱いで故山の貌でいる　有村　王志
108 ⑦夏座布団語りつくせぬ兄の居る　有村　王志
109 ②待春の水は粗目の味がする　松廣　李子
110 ⑧風鈴や体内時計の違ふ母　松廣　李子
111 ⑤睡蓮や久女の憂鬱などうふふ　松廣　李子
112 ①骨拾ふ一部始終や春夕焼　松廣　李子
113 ③指先に君を残して秋に入る　陣野千恵子
114 素になれる君との時間酔芙蓉　陣野千恵子
115 ③丑三つの金魚綺麗になるばかり　陣野千恵子
116 ③燃え上がる恋にもちゃんと水を打つ　陣野千恵子
117 ②曾良眠る壱岐に挙句の島椿　谷本　親史
118 忠直廊青葉さらさら世の移り　谷本　親史
119 ③敦盛の音色伝えて菊人形　谷本　親史
120 山頭火誦経は母にも霰降る　谷本　親史
121 ④マスクして無声映画の街をゆく　御手洗豊海
122 ③これからは余生と決めて冬銀河　御手洗豊海
123 ①遠き日の遠き思い出遠花火　御手洗豊海
124 梅雨晴間換気いそげの声が飛び　御手洗豊海
125 ⑩アフガンの涙を乗せて鶴来たる　幸谷　恵子
126 ①はがき出すポストの音も白露なり　幸谷　恵子
127 藤袴あしたはここに翔んでこい　幸谷　恵子
128 ②炎天下ボルトを締める男あり　幸谷　恵子
129 ⑥飲みこんだはずが飛び出るほうせんか　赤峰佐代子
130 ②除夜の鐘妻の一分(いちぶん)つきとおす　赤峰佐代子
131 ①菜の花の味する蜜や峡便り　赤峰佐代子
132 夜遊びの過ぎて秋思の街路灯　赤峰佐代子
133 なゝばけの朝の蒔こゝ(きざし)に呼ぶ　加藤　征孝
134 土砂降りの鴉哭いてゆく空　加藤　征孝
135 何もいらないただただ平凡な夏あかり　加藤　征孝

136 底辺の明(あかり)がちらほらふりかゝる　加藤征孝
137 秋声をききし長風呂夢心地　岡村　君香
138 ②夜なべして夫と作りし栗羊羹　岡村　君香
139 ①別れ道そっと寄り添う月あかり　岡村　君香
140 結果待つこのひとときの秋の空　岡村　君香
141 ⑦あじさいや朝の手紙にすこしうそ　伊藤　利惠
142 ①首すじという半島に大西日　伊藤　利惠
143 ①採血管にしずもるわが血やがて雨季　伊藤　利惠
144 男前のトラクター坐す春の土　伊藤　利惠
145 ⑨風鈴に母の小言を少し足す　児玉　利子
146 近況に曾孫加わる墓参り　児玉　利子
147 採れたての栗がバス呼ぶ道の駅　児玉　利子
148 ①コスモスの意外に強き足と腰　児玉　利子
149 ①狭庭に一本草原を恋う女郎花　倉迫　順子
150 トマトのようなほっぺトマト畑を走る　倉迫　順子
151 今にも会話に加わりそうな秋の遺影　倉迫　順子
152 ④出来ぬこと日毎に増えて秋が逝く　倉迫　順子
153 明易の夢を上書きして真白　田中　充
154 まくなぎに囲まれまたも負け戦　田中　充
155 ②いわし雲俳句の道は九十九折　田中　充
156 ①灯下親し過去の自分に逢いにゆく　田中　充
157 ①新緑の伽藍も今日の風の中　東　香代子
158 ③人面をいくつ探して柿落葉　東　香代子
159 指先を赤く染めたる土用干し　東　香代子
160 ⑥打ち水で客をもてなす下駄の街　東　香代子
161 ③タリバンと取引しない曼珠沙華　稲田久美子
162 ①しがらみを脱ぎ捨ててゆく法師蝉　稲田久美子
163 墓参りお隣さんは墓仕舞い　稲田久美子
164 ワクチンを打って痺れる解夏の腕　稲田久美子
165 野分け後の九重高原神代めく　平田千代子
166 ②父と子の黙して座る夏座敷　平田千代子

167 ①桐一葉オーヘンリーの贈りもの　平田千代子
168 ④世を捨てて秋蝶肩の力抜く　平田千代子
169 自宅療養震えているよ百日紅　白土　正江
170 ②「引っ越した」葉書に小さく花ききょう　白土　正江
171 鵙高音縄張争い疲れるよ　白土　正江
172 台帳を離さぬとんぼ震災忌　白土　正江
173 ①さやけしや全て中止の村行事　佐藤　哲夫
174 ③素人が頭叩いて買う西瓜　佐藤　哲夫
175 ③とんぼうと妻が見送る始発駅　佐藤　哲夫
176 秋晴に心は沈むばかりなり　佐藤　哲夫
177 ひび割れのアスファルトより蚯蚓鳴く　佐々木　玉
178 萩の風集めて故郷思い出す　佐々木　玉
179 破線からV字を保ち雁渡る　佐々木　玉
180 わんぱくのトレードマーク牛膝　佐々木　玉
181 ①穴を出て風に吹かれる青大将　岸本千鶴子
182 ④引き算の答となりし烏瓜　岸本千鶴子
183 ②大根煮るベートーベンを聴きながら　岸本千鶴子
184 見渡せばげんげ田三百六十度　岸本千鶴子
185 ⑤予約したように群れ来る盆とんぼ　鎌倉真由美
186 ②去る人を追えぬ性分おけら鳴く　鎌倉真由美
187 ②青蜜柑バージンロスの夢をみる　鎌倉真由美
188 ⑥濁り酒二口目から女です　鎌倉真由美
189 ②七人を育てし母や天花粉　森山　秀子
190 夏空に天下を沸かすスケートボード　森山　秀子
191 敗戦忌軍隊は民を守らない　森山　秀子
192 ①日田杉の下駄を鳴らして良夜かな　森山　秀子
193 青空や悔いなき一日に茄子の花　瀬波　瑞枝
194 ⑥一瞬に人皆生きて曼珠沙華　瀬波　瑞枝
195 ②この坂を越えねば逝けぬ冬の滝　瀬波　瑞枝
196 ④田の畦に亡き父燃えて曼珠沙華　瀬波　瑞枝
197 父母の青春短かしニセアカシア　下司　正昭
198 ④故里は未完のままに虫すだく　下司　正昭

199 ②戦せぬ山河誇りて秋収め　下司　正昭
200 ④あの夏を僕らは決して忘れない　下司　正昭
201 ③花種を蒔きて帰らぬ人を待つ　西峯　峰子
202 ③菊根分吾子には吾子の暮らしあり　西峯　峰子
203 湯が滾る厨に西日差し込みぬ　西峯　峰子
204 ①夕暮れは捨案山子とてさびしかろ　西峯　峰子
205 ⑫言い訳をしない金魚と目を合わす　上田たかし
206 ⑦地下鉄を出て風鈴の古本屋　上田たかし
207 ④赤とんぼまだ初恋がぶらさがる　上田たかし
208 ④昭和史の暗部は無言曼珠沙華　上田たかし
209 ①霧はれて日田の盆地の目覚めけり　畑　正彦
210 ②星月夜瑠璃ごぼれだすゴッホの絵　畑　正彦
211 底霧や亀山の丘の句碑に佇つ　畑　正彦
212 ①満月を波が称えて筑後川　畑　正彦
213 ②夕暮れは秋明菊のその世界　井上　則子
214 火葬場を背に下りおり草の絮　井上　則子
215 ①登校の歩幅小さく鰯雲　井上　則子
216 攻防戦守宮三匹風呂の窓　井上　則子
217 ④にんげんに右脳がありて春隣　本田　圭子
218 ①わが郷のジャガランダもう咲くころか　本田　圭子
219 ③結局はいつもの話しゃぼん玉　本田　圭子
220 ⑦焼きなすのところどころにある本音　本田　圭子
221 ①色を増す棚田の夕べ曼珠沙華　赤嶺　信子
222 一番になれない私曼珠沙華　赤嶺　信子
223 先客のおこぼれ三つ栗拾う　赤嶺　信子
224 ①毬栗の地球に刺さる鈍き音　赤嶺　信子
225 猫じゃらし一様に群れ総裁選　林　香澄
226 虫時雨流れ込んだり途絶えたり　林　香澄
227 ③唇に秋のこの唄連れてくる　林　香澄
228 ①温暖化名月の肌変わるらん　林　香澄
229 ⑧十五夜を残し早寝のしまい風呂　時松由美子
230 ④人住まぬ庭に律儀な金木犀　時松由美子
231 ①指先を染めて紫蘇の香通り雨　時松由美子
232 ①十六夜によび止められしふりむけり　吉田　素子
233 ②戦争の記憶の隅へ衣被　吉田　素子
234 ③地のほむら胸の焔に水を打つ　吉田　素子
235 ③たっぷりと水供えけり敗戦日　吉田　素子
236 ⑥核心に触れ得ず西瓜食べ終わる　吉田　素子
237 ⑥百六歳母に施設の夏祭り　安森　範明
238 ふるさとや煙突に虹かかりいて　安森　範明
239 ②人生も惑ひまどひて穴まどひ　安森　範明
240 ①書道展かなの優しさ桜貝　安森　範明
241 ①秋桜と言えば何より百恵ちゃん　衛藤　俊一
242 ②マニキュアの赤が哀しい白日傘　衛藤　俊一
243 踊りの輪きみの面影だけ探す　衛藤　俊一
244 赤とんぼ竿の先から出られない　衛藤　俊一
245 ②ハイボールアートブレーキー秋の宵　小野みち子
246 ②無花果の秘めた野心を噛みしめる　小野みち子
247 ②スタンダールの贖罪のごと冬茜　小野みち子
248 ③香水が遠いあの日を連れてくる　小野みち子
249 ⑮現世の闇の深さを赤とんぼ　足立　町子
250 ③放課後のふっと無口になる糸瓜　足立　町子
251 ⑩藁塚のひかりほどけて火の匂い　足立　町子
252 ①国捨てし遠きむかしや泡立草　足立　町子
253 ①みどり子の百年生きる面構え　井元　扇岳
254 真紅なる血の池地獄の蓮の花　井元　扇岳
255 世代越え聖火の走る郷土愛　井元　扇岳
256 ④新姓になりし孫娘（むすめ）の年賀状　井元　扇岳

令和三年自薦作品選＆選評

◆到着順◆

有村　王志　選

【31、41、63、71、73、81、111、149、170、194】

73　**永遠に泣かぬ子となり初秋祭**　（河野　輝暉）

人それぞれに親子兄弟、その肉親の死にさまざまな想いがある。私自身、長兄は私が生まれたときはすでに出征し昭和二十年四月二十日に比島のクラーク飛行場近くの山中で死亡、いわゆる遺骨無き未帰還兵の一人。

掲句はご存知の方もおられると思いますが、河野輝暉氏のご子息夏樹氏への哀悼句。走馬灯のように喪主を務めた作者。深々とした想いに駆られる。下五の初秋祭には配合の妙がある。実態と実感のなかでの吐露である。

大神　愛子　選

【13、30、71、74、95、104、138、162、205、237】

74　**初夏へ子の名は夏樹納骨す**　（河野　輝暉）

胸に、悲しみが伝わってきて、泣けてきます。身内の納骨を終え、ホッとした心と悲しさが、日々深くなりますよね。元気を出して息子さんの分も長生きして下さい。

宮川三保子　選

【5、29、73、83、104、105、125、155、208、251】

105　**真夏日の死ぬまで戦死の兄を詠む**　（有村　王志）

かの太平洋戦争でお兄様を亡くされた作者の悲しみが伝わってきました。

原爆の日がある夏の真最中、俳句を通してお兄様のことを詠み続けると言われる弟の気持が深く心に残る作品で印象に残りました。
戦争を知らない世代が多い現代、書き残していきたいテーマだと思いました。

菅　登貴子　選

【7、30、42、73、81、98、101、105、205、215】

長谷川正伸　選

【32、75、81、95、105、111、116、188、207、220】

加藤　知子　選

【3、5、7、115、121、129、141、182、229、250】

小川　良子　選

【9、28、33、81、92、108、138、145、198、256】

108 **夏座布団語りつくせぬ兄の居る**
（有村　王志）

お兄さんは戦争に行って苦労したのでしょう。語りつくせない困難があったと推察します。

佐藤　優美　選

【14、29、74、83、87、105、106、125、200、247】

87 **新聞をぱさりと閉じて終戦日**
（足立　鶴男）

八月十五日の終戦日の新聞は八月六日、八月九日の、原爆投下をもって敗戦となった記事や様々な戦争体験を語る記事で一杯だったことだろう。作者はそれを読みつくして、ああ今日は終戦日だったとかみしめながら、新聞をぱさりと閉じたのである。終戦前後に生まれた世代の多い我々は、戦争の苛酷さを後世に語り継ぐ義務がある。

足立　攝　選

【5、24、48、76、82、93、98、110、125、142】

下司　正昭　選

【29、32、73、82、100、175、210、227、233、237】

73 **永遠に泣かぬ子となり初秋祭**
（河野　輝暉）

親より子供が先に逝くことを逆縁という。辞書によると「通念では先に死ぬ運命にある親が生き残って逆に子の供養をすること」とある。逆縁は、親にとってこんな親不幸なことはない。御両親の驚きと悲しみは、計り知れないものがある。永遠に泣かぬ子となりの上五、中七に深い悲しみがひしひしと伝わって来る。
御子息の御冥福をお祈り致します。合掌

加藤　征孝　選

【7、12、23、48、52、82、105、139、152、200】

12 **裸木を横目にポーズ百の歳**
（嶋末　洋子）

みんな長生する時代。私も百歳まで生きたいと思う。長女の姉が私と十一才違いなので九十一才です。そう言えば飯田龍太先生がかけあいをやろうやと云われたのを覚えている。何せ私は旅烏だったので意に添えなかった。大変なことだったと思う。
余談だが清張先生が他界した病名は癌だった。一晩中話しをした。私にくれた言葉は「しょせん」己の道は、己で開けということだ。

菅　攝子　選

【5、32、64、73、75、84、90、104、106、207】

207 **赤とんぼまだ初恋がぶらさがる**
（上田たかし）

作者の幼いころの初恋であろうか。とんぼをひらがなにしたのがいい。
初恋に赤とんぼ、まわりの空気までが透みきっている。平和を感じます。

福田　英子　選

【1、6、74、83、104、121、182、194、234、251】

河野　輝暉　選

【5、48、68、100、110、167、183、217、239、241】

183 **大根煮るベートーベンを聴きながら**
（岸本千鶴子）

「死にたれば人来て大根炊き始む（槐太）」という句がある。大根は公私に無くてはならぬ卑近で親しく、貧しさ、不幸な際に至る迄、日本民族に浸透した食材である。だから安心して、平凡だなと読んでいる。突然そこへ世界的北斗のベートーベンのご登場にびっくりする。この堪能すべき違和感がたまらない。淡々としたリズムの流れまで心憎い。二物衝撃もどこかに遊びの味が添っていて人を食ったユーモアまでサービスした妙句であると思う。

森山　秀子　選

【3、32、55、72、83、108、161、195、230、249】

灘波　瑞枝　選

【1、21、30、33、73、74、83、200、237、249】

谷川　彰啓　選

【21、69、100、101、112、125、196、205、236、249】

21　**加速する荒廃農地捨案山子**

（田代　直之）

荒廃してゆく農業の現状を厳しく見つめた作品。荒れてゆく農地の象徴として〈捨案山子〉でとらえた。「加速する」に作者の憂いと淋しさが心に沁みる。

甲斐　順子　選

【21、30、35、48、81、130、194、202、209、229】

河野　泉　選

【29、48、65、73、83、95、141、145、181、251】

あべまさる　選

【23、30、35、69、82、102、121、141、185、207】

坂本　一光　選

【1、17、32、45、81、87、129、198、234、250】

129　**飲みこんだはずが飛び出るほうせんか**

（赤峰佐代子）

飲みこんだのは、ものか、ことか、ことばか。一度は納得して飲みこんだものが、ちょっと待てよ、と飛び出てしまった。まるで、ほうせんかのはじけたようだと言う。確かにそんな経験がある。人間をうたうと笑いが生まれる。

――川柳に通ずる世界に脱帽、である。

小野みち子　選

【1、17、31、44、83、141、158、166、183、219】

安森　範明　選

【21、65、76、77、81、92、114、218、229、242】

77　**秋深く手術夜の亡夫会いに来た**

（大神　愛子）

夫の介護に愛情を込めて、精一つぱいつくし、夫が亡くなった後も子育てに苦労したことでしょう。そして作者も年を取り、骨折か、手術をした夜亡夫が枕元に立った。心配して。作者にどれだけ生前は感謝したことか想像します。秋深くが淋しく悲しい。前を向いて「今」をしっかり生きましょう。

原田　勝子　選

【23、33、67、76、86、108、125、160、213、229】

33　**吹く風に向き合うのれんななかまど**

（甲斐　加代子）

ななかまどとは七回火にくべても焼けないと云う様に強い木だと随分前に聞いた事があります。長年守って来られた老舗のれん。今の時世に吹っ飛んで来た様なコロナ禍に負けてたまるかと、ななかまどになり切った気持で、これからも強い心で頑張ってのれんを守っていこうと云う作者の心根に感銘を受けました。

神　慶子　選

【1、31、82、106、157、168、185、219、247、249】

岸本千鶴子　選

【1、5、29、66、73、81、106、145、198、206】

河野　則子　選

【5、6、16、25、65、76、104、109、110、249】

林　香澄　選

【4、34、44、77、98、116、189、229、236、256】

116　**燃え上がる恋にもちゃんと水を打つ**

（陣野千恵子）

歯切れの良いリズミカルな名言句、恋愛相談百の回答より効果的。しかしそうはゆかぬ恋の道。でも何度も水を打ち、冷ましながら育てる愛こそ・・・。兎に角もう遅い。孫には教えておこう。いつになく、楽しく昔を振り返りました。千恵子先輩、ありがとうございました。

立麻　琴路　選

【7、32、65、75、83、108、182、196、205、251】

甲斐加代子　選

【1、15、32、73、81、129、156、213、229、233】

156　**灯下親し過去の自分に逢いにゆく**

（田中　充）

秋の夜長の静かなひととき。年老いてくると思う事余り多く、特に自分史を振り返ります。作者の、思い出すのではなく、過去の自分に逢いにゆくと云う、やさしいフレーズに私もそうあやかりたいものだと共鳴致しました。

安田　文　選

【7、22、66、90、107、122、152、173、185、251】

251　**藁塚のひかりほどけて火の匂い**

（足立　町子）

今は、藁塚の風景ほとんど見掛けることはなく子供の頃藁塚の廻りで遊んだものです。暖かな日差しの中両手を広げ耳をあて、お日様の匂

いや温もりを藁塚に感じながら、兄や妹とはしゃいだこと、懐かしく思い出しました。

菅　勲　選

【1、42、73、81、90、97、105、196、239、256】

1　**素直なるものから揺れて秋の風**

（梶原　千代）

正直ものが馬鹿を見ない、素直で正直な生活をおくっている人が世の中の中心となれる世界が来ることを願うばかりです。

秋の風が吹けば、素直なものが一番最初に揺れる自然の尊さが、かいま見れる句と思っています。

陣野千恵子　選

【1、30、38、57、83、108、129、188、220、236】

236　**核心に触れ得ず西瓜食べ終わる**

（吉田　素子）

別れ話を切り出そうとしていた男女の緊迫した空気の中でのことか、それとも、告白をしようとしていたのか。とうとう、核心（ひとこと）に辿り着けず、西瓜一切れを食べ終えてしまったのですね。木洩れ陽やせみしぐれまで聞こえてきそうな句です。二人の息もできないような空気まで伝わってきます。

梶原　千代　選

【71、110、114、145、155、196、201、220、234、248】

御手洗豊海　選

【7、17、21、29、67、84、160、194、205、249】

早澤まり子　選

【4、27、31、48、70、81、83、102、105、249】

70　**白粉花ゆっくり渡る夫婦杖**

（宮川三保子）

この句を読んで最初に美しさを感じました。多分紆余曲折もあった事と推察します。今を元気でお二人揃って歩けることは、大切な、喜びと思います。命の尊さを改めて考えなくてはと深く感じます。人生の良いお手本ではないでしょうか。良き日を過ごされる事を祈ります。

嶋末　洋子　選

【27、30、47、67、88、107、207、220、231、249】

谷本　親史　選

【1、12、14、41、74、101、185、205、237、256】

41　かきつばた女ざかりを過ぎてなお

（神　慶子）

「かきつばた」はあやめと共に愛でられる五月花。桜が散って暫くの初夏を彩ります。平安の在原業平は東下りで、都の人に流離の愁いを詠みます。江戸の絵師は王朝の風雅に憧れ、花図を屏風に残しました。以来、花は着物の柄にも親しまれています。

器量、輝きはアラフォーまでではないです。業平の情感を、絵師の雅を、共有して生きる心の拡がりに、本当の魅力を感じました。

残照の身の応援句としていただきます。

畑　正彦　選

【7、32、103、108、113、145、160、205、221、232】

永松左世美　選

【34、71、82、110、145、174、187、189、205、220】

205　**言い訳をしない金魚と目を合わす**

（上田たかし）

金魚はかわいい魚です。かってみたいと思います。

本田　圭子　選

【4、5、29、41、65、83、99、160、246、249】

竹下美津子　選

【21、43、51、73、78、85、105、170、201、230】

西峯　峰子　選

【12、20、28、37、67、74、81、83、130、168】

時松　由美子　選

【7、34、76、83、96、98、110、131、192、227】

井上　則子　選

【27、33、75、84、101、111、119、125、235、251】

平田千代子　選

【21、42、47、74、106、152、158、160、206、246】

158　**人面をいくつ探して柿落葉**

（東　香代子）

若い頃は休みになると子どもを連れてよく実家に帰った。秋の田舎はいろんな果物があり楽しかった。積った葉の中から銀杏の黄色と、色鮮やかな柿の葉は特に美しかった。子どもたちはその中から不揃いな目や口のある葉を探しては仲良しの友だちや動物の顔に見立てて楽しん

でいた。田舎の自然は身も心も癒される。子どもたちも今は人の親として大台に乗る年になった。いろんな言い方があるけれども月日の経つのは早いものである。

岡村　君香　選

【14、40、43、48、67、113、122、145、219、248】

122 **これからは余生と決めて冬銀河**

（御手洗豊海）

退職後の第二の人生をどのように過ごしていくのか。冬の空気の澄み切った満天の星の「冬銀河」によって、その決意がより鮮明に明確になった様子が伝わってきました。

東　香代子　選

【14、30、42、117、125、166、220、237、245、252】

髙木　礼子　選

【6、17、23、48、83、87、122、160、194、208】

幸谷　恵子　選

【3、32、73、87、101、129、174、201、217、249】

87 **新聞をぱさりと閉じて終戦日**

（足立　鶴男）

終戦の日の新聞には、戦争の記事がズラリと書かれている。その新聞をぱさりと閉じる作者の心情は辛い過去との決別であろうか。未来への平和を念じているように感じる。

赤峰佐代子　選

【29、33、65、93、105、141、198、202、230、236】

松廣　李子　選

【1、32、48、68、73、81、99、119、143、175】

175 **とんぼうと妻が見送る始発駅**

（佐藤　哲夫）

作者は違う意で詠まれたのかも知れませんが、始発駅は亡くなった人を黄泉の国へと送り出す列車の「始発駅」と読みました。ご先祖様の化身といわれる蜻蛉と妻に見守られ送られる、作者の願望句でしょう。夫もそう言いそうです。

田原　夏子　選

【7、30、42、55、91、105、174、230、235、248】

佐藤　哲夫　選

【29、42、65、81、101、116、128、188、206、228】

81 **にんげんの終の姿か日向ぼこ**

（谷川　彰啓）

田舎暮らしを始めて、二十二年。家の前がバス停と、塵の集積場となっているので、日向ぼこが出来る様にと、三人掛けの椅子を用意しました。ばあちゃん達に好評で、井戸端会議をしながら日向ぼこが、出来ると喜びました。が、世の流れを止める事は出来ず、高齢者は少なくなりましたので、私が当時を偲んで、時々日向ぼこをしています。私の終の姿かも。

鎌倉真由美　選

【4、5、44、76、83、87、103、111、115、250】

76 **喪疲れやのたりのたりと春の海**

（河野　輝暉）

世の中がいか様に変ろうと、愛しい者を失う辛さ、悲しみは変わりません。日本の葬式は、最も悲しみの深い人に、忙しい気遣いを強いています。通夜に葬儀に初七日にと、浴びるような慰めの言葉を受け、むしろ心が起きあがれなくなります。まさに喪疲れです。

そんな時、人の事など無関心な春の海がのたりのたりと。その能天気さに救われる心情がとても理解出来ました。

岡野　成美　選

【2、5、31、57、73、129、145、182、229、251】

5 **いっぽんの海になるまで刃物とぐ**

（河野　泉）

農作業に打ち込む作者が、大海原の水平線のように一直線に見えるようになるまで、カマを研ぐ姿が想像されます。刃物を研ぎあげる事が海を連想すること自体、作者の心の広さを感じました。何事にも一生懸命に打ち込む姿を想像できます。

伊藤　利惠　選

【47、76、93、110、111、115、128、206、217、236】

田代　直之　選

【5、29、32、84、104、125、145、205、220、237】

赤嶺　信子　選

【1、4、7、21、35、39、108、188、206、212】

212 **満月を波が称えて筑後川**

（畑　正彦）

スケールが大きく、包み込まれそうです。ゆるやかな筑後川の映像と筑後弁まで聞こえてきます。さらに満月と波。組み合わせから光や色、

音までも感じさせます。おだやかな風景。
「波が称え」が特に印象的でした。生まれる前からこの風景があったかと思うと、さらに感慨深い句です。

丘　友子　選

【21、29、73、90、94、121、125、199、210、227】

125 **アフガンの涙を乗せて鶴来たる**
（幸谷　恵子）

わかりやすく、美しくロマンチックな感じさえ与える句である。しかし、アフガン、涙を乗せてに目を向けると胸迫る思いが込みあげてくる。アフガニスタンの国情については、ほとんど皆無であるが、何十年にもわたる不安要素（様々な国の利害関係、宗教上の問題による政権争い、テロ、対人地雷、災害や食料不足、女性の人権、麻薬栽培等）が国民を苦しめ続けている。中七の涙を乗せてが涙の意味深さ、重さを印象づけている。

田中　充　選

【3、17、83、99、117、152、168、194、205、208】

117 **曾良眠る壱岐に挙句の島椿**
（谷本　親史）

曾良は幕府の巡見使随員として九州に赴き、壱岐勝本にて62歳で客死した。壱岐の人に死後も愛され続け、現在に至るまで手厚く供養されている。勝本に墓と句碑がある。芭蕉の信頼が厚く、地誌や神道に通じた教養人であり、「奥の細道」の旅の随行者としてふさわしい人物であった。終焉の地で思慕する芭蕉を捌き手として歌仙を巻き、挙句に島椿を詠み込んで座が大いに盛り上がっている。そんな光景が目に浮かぶ句である。

倉迫　順子　選

【21、32、73、83、94、104、126、145、202、251】

73 **永遠に泣かぬ子となり初秋祭**
（河野　輝暉）

泣く飲む眠るが嬰児の大切な仕事なのに、初めての秋祭を迎える前に、もう永遠に泣かなくなった嬰児。切ないですね。周囲の祈り願いも虚しく消えてしまった小さな命の灯。今在る命の尊さ、有難さを改めて思っています。

白土　正江　選

【30、75、106、114、141、168、186、199、205、251】

186 **去る人を追えぬ性分おけら鳴く**
（鎌倉真由美）

実感のこもった俳句と思います。友人とのけんか別れかあるいは恋人かわかりませんが何だかくやしくて素直になれずあとを追ってゆけない自分がいます。ほんとは追っていきたい気持ちもあるのにいけません、そこを性分という表現でうまく現わしていると思います。おけら鳴くの季語もユーモラスで深刻な場面をさらりと表現できて思わずニヤリと、共感してしまいました。

佐々木　玉　選

【5、31、42、47、71、104、119、125、224、249】

224 **毬栗の地球に刺さる鈍き音**
（赤嶺　信子）

小さな毬が地球に刺さるとは、面白いですね。その落ちた音が鈍いと下五に持ってきているのが効いています。

久枝　花城　選

【37、76、109、123、141、158、185、204、240、245】

240 **書道展かなの優しさ桜貝**
（安森　範明）

はるか昔、高校生の時、学校の裏の海岸で桜貝の殻を拾ったことがある。横長の消しゴム位の形と大きさだった。うすいピンクのやわらかな貌の貝殻で、「桜」の名前が付いているのに何の違和感も感じなかった。
この句では、今度は「かな」（平仮名）文字のやわらかさ、優しさが桜貝に例えられている。日本での桜の花のものすごい人気から見ても、日本の文化の要素の一つに、やわらかさ、優しさ原理があるのだろうと思う。

佐藤　珠幸　選

【4、29、31、113、161、187、188、205、206、236】

188 **濁り酒二口目から女です**
（鎌倉真由美）

ほのかな艶っぽさの中に、芯のある女性が、現されていて、きっぱり感も含めて、とても素敵だと思いました。

上田たかし　選

【7、29、61、71、76、84、104、107、188、251】

76 喪疲れやのたりのたりと春の海
（河野　輝暉）

最愛の肉親を失った苦しみが、全句を通じてひしひしと伝わって来る。人の死に対して、ど

う対処していくのかも教えられた気がする。
蕪村の、「春の海ひねもすのたりのたりかな」とは異なり、喪疲れと春の海の二物配合に、心の休まる心境が綴られており、感銘を受けた。

児玉　利子　選

【17、27、39、51、73、105、161、208、235、249】

山本　悦子　選

【5、29、34、42、73、106、206、229、249、253】

73　永遠に泣かぬ子となり初秋祭
（河野　輝暉）

子どもは泣いて笑って育っていくもの。それが永遠に泣かぬ子になったとは…。子に先立たれた悲しい胸のうちが、ひしひしと伝わってきます。

夢野はる香　選

【4、31、33、72、73、82、96、186、195、249】

足立　町子　選

【7、47、71、76、87、95、110、148、175、217】

95　この西瓜あげてさげれば僕のもの
（佐藤　珠幸）

長く生きてきて「ん、それ屁理屈でしょ」と思うことはよくある。この作品の台詞もまさにそれを感じて笑ってしまった。
ある少年が「おじいちゃんにお供えして」と母に渡された西瓜の皿。滴る果汁、甘い香り。
少年は取りあえず言われたとおりに供えて、二分ほど？そのままにして、次には少年のものになるのである。ちゃっかりした少年で、母親もそこまでは気付かなかったに違いない。
日本には、仏さまに供えたものを頂くことを「お下がり」と呼び習わしている。茶目っ気たっぷりの、この句いいなあ。

井元　扇岳

【5、40、76、84、91、98、105、200、242、249】

●自薦作品には64人の会員から投句が寄せられ、選句＆選評には会員外の6名を含む、合計72人の方の参加がありました。

●会員外選者の一人、熊本県現代俳句協会の会長である加藤知子さんからは「いつも熱意あふれる会報をありがとうございます。皆さんの俳句のレベルが高くてその気力体力と切磋琢磨を続けられることにビックリしています」という、メッセージが届いています。私たちの励みになります。ありがとうございました。

●俳句上達の最大の秘訣は、自分で作って、自分だけのものにせずに、とにかく「人の目にさらして」反応を見ることです。自信を持つにしても落ち込むにしても、自分だけの判断では独りよがりになります。自信家の人や、社会的な地位が高い人は、とくに「人目にさらす」ことを嫌がるようです。ここが最初の難関です。

●選句や選評の上達の秘訣も全く同様です。俳句が上達したら自動的に選句能力がつくわけではありません。別の能力ですから、個別に練習するしかありません。とにかく「人目にさらす」ことが上達のスタートラインです。

●選評をする人がまだまだ少ないようです。会員全員の平等なチャンスを生かしてください。

協会外　選句＆選評　協力者

※心からお礼を申し上げます。

・田原　夏子氏（俳句人）
・丘　　友子氏（俳句人）
・山本　悦子氏（天籟通信）
・夢野はる香氏（天籟通信）
・佐藤　優美氏（津留句会）
・加藤　知子氏（熊本県協会会長）

令和4年　第1回雑詠句会
〈作品募集〉

※第1回雑詠句会作品を募集します。ひとり3句で当協会未発表のもの。当季雑詠。
※年2回の雑詠句会と、8月募集の自薦作品の計10句が特別選者による年間一句賞の対象になります。
※締切は令和4年2月18日（金）消印。
※ハガキ、FAX、メール等でお送りください。送り先は事務局まで。
※句会報15号（10月末発行）の「自薦作品選句用紙」等で、投句を済まされた方は除きます。重複投句は新しい方を採用します。

大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長　有村王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立　攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:http://www.gendaihaiku.net

E-Mail: info@gendaihaiku.net